

さらば！ かいぞくたち

さらば！  
かいぞくたち

敦賀市立咸新小学校

六年

山本 勉 やまもと つとむ  
山北 雅也 やまきた まさや  
山口 尚志 たけぐち ひさし  
竹口 尚志 たけぐち ひさし



各務原市立鵜沼第一小学校

五年

嶋悠希 しま ゆうき  
倉内 あすか くらうち あすか  
木野 菜々 きのの なな

一八四九年、世界は海ぞくの世の中となっていた。ある日、ある島に海ぞくが宝をうばいにせめてきた。あまりの強さに兵は全く役に立たず、島の住人はおびえた。しかし、その海ぞくに立ち向かう一人の若者がいた。

かれの名は、ドクター・フェルプス。すぐくかしこく、力もあり、何でもできるゆうしゅうな若者で、先祖代々、医者の家系だった。将来を期待されていたが、ある日とつ然姿を消してしまっていた。

ところが、ふるさとの島で海ぞくが暴れているというわさを聞きつけて、半年ぶりに愛用の船「ロスト号」に乗ってもどって来たのだった。

ドクター・フェルプスは、海ぞく船に乗りこみ、敵の海ぞくを次々にたおしていった。大ほうのたまにも全く当たることなく、海ぞくから宝を取り戻し、けがをした人々の手当をした。

数日が過ぎ、島では新たな生活が始まろうとしていた頃、海ぞくの親分が復しゅうにやって来た。村の住民はだれ一人、海ぞく船が近づいていることに気

づかなかったが、ドクター・フェルプスだけはきたえた視力で千メートル先の海ぞく船を見つけた。そして、千人をこすかのような敵の大軍におどろいた。

一人では無理だと考えたドクター・フェルプスは、急いで村の人たちを集めた。集められた人たちはざっと千人。だんだん近づいてくる敵を見て、ドクター・フェルプスは、

「目には目を、歯には歯を、大ほうには大ほうだ」

と一時間、いや三十分もたたないうちに大ほうを準備した。

島の人たちからは、

「さすがだー」

「よっ、天才！」

などの声が上がった。

「敵が来たぞっ」

ドクター・フェルプスがさげび、みんなは戦とう準備をした。

「大ほう、発射準備！」

「発射用意。十、九、八、七、六、五、四、三、二、一、発射！」

ドクター・フェルプスの合図とともに、住民たちは大ほうを発射した。しかし、大ほうのたまは、海ぞく船によけられてしまった。

「ちっ、外してしまった」

ドクター・フェルプスはくやしがあった。

そのとき、海ぞく船から大ほうが発射され、ドクター・フェルプスに当たり、大さわぎになった。ドクター・フェルプスは、飛ばされながらも、自分の力でたまを受け止めた。

「絶対に、たおす！」

おこったドクター・フェルプスは、大ほうのたまを海ぞく船に向かって坂から転がし、せめてくる海ぞくをふき飛ばした。

「くそっ、やっちまえ」

海ぞくのボスはおこつて次々に手下を送りこんだ。

ドクター・フェルプスは、残りの大ほうのたまをボーリングのように坂から転がして次々と海ぞくをふき飛ばした。

転がったたまが海ぞく船に当たって、船がしずんでしまったので、海ぞくたちは次々に島に上陸し始めた。

いよいよ、ドクター・フェルプスが半年間姿を消して身につけた力を発揮する時がきた。

ドクター・フェルプスは、なんといきなり地面をたたき出したのだ。

「そんなことをして、どうしようと言うんだ。おれたちの勝ちだ。ハッハッハッ」

海ぞくのボスが笑った。

「ん、何だ？ そんなバカな。なんだ、この地ひびきは……。いったい何が起きてるんだ」

「フツ、そんなこともわからないのか。バカどもめ。フツフツフツ」

ドクター・フェルプスは最後の一回をたたいた。すると、海ぞくたちとドクター・フェルプスとの間の地面が割れ、海ぞくのいる島が沈んでしまった。

「くそー、向こうまで行かないと、この島の宝がうばえない」

海ぞくのボスは、真の力を出そうとしていた。

「ん、何だ。海ぞくのボスが下で何かをしている」

「おまえらの島もこっちの島と同じくらい下げてやる」★

そう言って、フェルプスたちの島を同じ高さまで下げた。

ドクター・フェルプスは負けをさとった。体はつかれてきているし、大ぼうのたまも少ししか残っていない。

「宝物を持って来い。持って来ないとおまえをうつぞ。いいのか、このやろう」  
ボスがどなりました。

「そんなことを言うんじゃないぞ、海ぞくさん。やあ、フェルプスくん。元氣

でしたか」

フェルプスの後の方から声がした。ふりむくとそこには、親友のプルフェスが立っていた。プルフェスは、昔からの友達で、フェルプスと同じようにすごくかしこく、力もあり、ゆうしゆうな若者だった。

「あぶないから、さがってる。プルフェス」

「あぶないのは、そっちだろう」

「ごちゃごちゃうるせい、さっさと宝物を持って来い」

「ノーだ！」

「行けっ、戦いの用意だ。おまえら、ようしやしないからな」

「いくぞ、プルフェス」

「ああ、フェルプス」

大決戦が始まった。みんなは剣を持って走っていった。プルフェスとフェルプスは、すごい速さで剣をふりまわした。



住人たちは二人の若者の無事を神に願った。戦いは長い時間かかり、フェルプスはつかれはてて、何度もおれそうになった。しかしプルフェスに何度も声をかけられ、住人たちにも応えんされ、フェルプスは元気を取りもどした。二時間近い必死の戦いの末、フェルプスとプルフェスは勝利し、海ぞくたちから宝物を守った。海ぞくたちはフェルプスとプルフェスのあまりの強さにあきらめて島に帰って行った。

「近いうちに必ず宝物をうばってやる」と言いながら……。

親友のプルフェスは、一週間もしたらまた旅に出してしまうという。今度海ぞくがせめてくるまでに、フェルプスはまだまだ力をつけなくてはならなかった。戦いでかなりの力を使い果たし、二人はつかれてねむってしまった。体調もよくなく、なかなか力をつけることが出来ない。住人たちはとても心配した。目をさますと、ジョイの家だった。ジョイは心やさしい住人で、二人にあたた

かいスープを作ってくれた。

「よかったらこのスープを飲んでください。体によく効きますよ」

とても元氣の出るスープだった。これは神様からのおくり物だと二人は感じた。やがて二人は回復し元氣を取りもどした。

そして、プルフェスとの別れの日がやってきた。今度はいつ会えるだろうか。

フェルプスは、特くんを始めた。

「オレが絶対住人を守る」

そう決心した。

「僕たちをすくってくれたジョイのためにもがんばろう」

次第にフェルプスは力をつけていった。

一ヶ月後、ふたたび海ぞくたちが、フェルプスの島にせめてきた。住人たちはみんな集まって、二度とせめられないように協力して作戦をたてた。

フェルプスが、いいアイデアを思いついた。

「海ぞくたちが島に入れないように、石や岩でかべを作ろう」

住人にこのアイデアを話すと、

「石や岩がたくさんあるところを知っているよ。案内しよう」と連れて行ってくれた。

フェルプスは、住人たちと石や岩のとても大きなかべを作った。

「がんじょうなかべができた」

と、フェルプスはよろこんだ。住人たちも、

「フェルプスのおかげで、こんながんじょうなかべができた。きっと海ぞくもこれなら島には入れないよ」

と、うれしそう。

しばらくして、また海ぞくたちがせめてきた。

しかし、がんじょうなかべは、海ぞくが何時間大ほうをうつつてもこわれなかった。

海ぞくはこれ以上大ほうをつかつてはたまがなくなってしまうと思い、あきらめて帰っていった。

住人たちはとても喜んで、フェルプスに食べ物やいろんなものをあげた。  
この島は、とても平和になった。